

蓮はすの宇宙



松山俊太郎

安藤礼二

編・
解題

写真・細江英公

編・解題は、気鋭の文芸評論家
安藤礼二氏（『折口信夫』『光の曼陀羅』）による。

松山の人となりと業績について、
巖谷國士、澁澤龍子、坪内祐三、
磯崎純一（国書刊行会）諸氏が語る——しおり 葉封入。

仕様：A5判上製 約500ページ+葉12ページ
装幀：間村俊一
定価：9,000円+税 ISBN：978-4-7783-1491-0
発売：2016年8月上旬 発行：太田出版

ご注文締め切り：2016年6月30日（当社着）

貴重な論考
図版が満載！

インド、法華経、
ボードレール、そして蓮。
無限をおそれぬ探求の果てに、
独自の学問を築き上げた
伝説の碩学・松山俊太郎。
仏教学、インド学上の
代表的かつ
画期的な業績を編んだ
「松山学」の集大成。



「ウォーン」

と犬の遠吠え。だんだん近づいてくる。

「あっ、松山さんだ！」

「こんばんは、イヌです」

とニタッと笑って、着物姿の松山さんが
玄関に入っていらっしゃると、
まだ準備中ですがこのままお正月に突入です。

「さようなら、松山俊太郎さん」

—— 澁澤龍子

Ryuko Shibusawa

マジで私は松山さんが

百歳になっても
元気で酒を飲んで
いるだろう

と思っていた。

松山さんが百歳の時、私は七十二歳。

一緒に酒を共にしたかった。

「松山俊太郎さんと私の少しの縁」

—— 坪内祐三

Yuzo Tsubouchi

葉より

百万年かかる

松山さんが

といていた「蓮の研究」は、ある種の連続性の
体現・実践でもあったのだろう。

蕾も生まれていることだし、

松山さんにとって松山さん自身の

死は何ほどの
ことでもない。

「白蓮図」

—— 巖谷國士

Kunio Iwaya

「松山大人の文章を纏めた一冊を作ろうぜ!」と
大盛り上がりになり盛り上がり、
それがきっかけで生れたのが
『綺想礼讃』という本なのである。(…)

ソクラテス、孔子、
キリストとともに、
決して本をつくらない

哲人として、松山さんの存在は
われわれ編集者の間では伝説化されていた。

「綺想礼讃秘話」

—— 磯崎純一 (国書刊行会)

Junichi Isozaki

【目次】

I インドの詩と性愛

愛蓮餘滴

インドの香り

インド・古詩 シュリンガーラ・ティラカ

蓮から「さかしま」に

漢語の愛について インドにおける愛の思想・序説

〈愛〉の意味・〈愛〉の言語

インド古詩抄 鄙の恋・都の恋(訳)

中世天竺 恋愛八十相(解説・訳・注)

インド古典芸術における「女主人公(ナーイカー)」の分類

インド古典と現代日本

タゴール、大インドの人格化

II 蓮の神話学

わが到り得ぬ日蓮

ロータスの環

仏典における信ずるべからざる部分のおもしろさ

法華経と無熱惱池および蓮華上仏

アパダーナと法華経

ヴィシュヌ神とアヴァターラ

古代インド人の宇宙像

インドの回帰的終末説

華嚴経の宇宙

一閻台のマンダラ

III 幻のインド

—— 講演・インタビュー・対談・座談

講演 「芸術として見た仏典」

インタビュー 「蓮を究める」

対談 輪廻転生

—— 死の思想の源流を探る(鈴木清順)

共同討議 なぜボードレールか

(出口裕弘・渋沢孝輔・阿部良雄)

対談 読みかけのページ

—— 「少年倶楽部」の余白への夢(寺山修司)

対談 蓮華宇宙を語る(松岡正剛)

ほか ・ 解題(安藤礼二) ・ 年譜(丹羽蒼一郎)

・ 書誌目録

解題

松山俊太郎 蓮の宇宙

安藤礼二

演劇や舞踏などにおける身体芸術の革新、詩や小説などにおける言語芸術の革新が社会的かつ政治的な革新とともに推し進められていくことが希求された一九六〇年代、松山俊太郎は、土方巽や唐十郎、澁澤龍彦や種村季弘、さらには三島由紀夫などとの神話的な交遊を通して、その活発な運動の渦の一つの中心にいた。想像力の変革が現実の変革に通じ、既成の表現の秩序を覆していくことと既成の制度の秩序を覆していくことは等しかった。

十六歳のとき、自宅の部屋で手製の手榴弾を分解中に暴発し、左手の手首から先、右手は親指を失い、人差し指と中指が変形してしまった松山は、その存在自体がすでに過激でアナーキーだった。ある種の過剰な暴力性と、それと表裏一体をなす限りのない優しさを矛盾することなく同居させる稀有な存在でもあった。松山と度でも親

しく触れ合う機会をもった者であれば誰もが、その出会いの僥倖を懐かしく回想する、そうした人物であった。その松山は、生涯、「梵文学者」を名乗った。

インドの「文学」は古代から現代まで連続し、そこにさまざまな要素を外部から取り込み、一つに融け合わせ、複雑かつ重層的に発展してきた。インドの表現において、文学と思想、文学と宗教を分けることはできない。さまざまな感覚を一つに総合する詩的表現が、華麗で壮大な宇宙論と直結していた。インドは「豊饒」である。しかしその真の姿は誰にとっても掴みがたく、インドはまた「幻」でもある。

松山は繰り返し、そう記していた（富永仲基の所見にもとづく）。豊饒であるが「幻」としてしか存在し得ないもの、それは松山のインド研究そのものでもあった。（中略）

松山俊太郎が構想していた〈イン

ド学〉の全貌を知るためには、「詩と性愛」と「蓮の神話学」という二つの観点のどちらをも必要とする。単行本としてまとめられた三冊の書物はいずれも語りを活字として起こしたものであるが故、平易ではあるがやや焦点がぼやけ、三つの雑誌連載はいずれも長期にわたったが故、典拠の提示と論旨の展開が錯綜をきわめてしまっている。さまざまな機会に、さまざまな媒体に発表された諸論考を、松山インド学を成り立たせている二つの柱に集約するようなか

たちで、松山文学論の決定版である『綺想礼讃』と双壁をなすような松山インド論の決定版を三冊の書物としてまとめること。それが、本書『松山俊太郎 蓮の宇宙』を編集するにあたって、最もはじめに意図されたものである。

本書『松山俊太郎 蓮の宇宙』は、まず「松山俊太郎」という特権的な固有名を冠し、第一章を

「インドの詩と性愛」としてその主題に関連する諸論考をまとめ、第二章を「蓮の神話学」としてその主題に関連する諸論考をまとめ、第三章には、これまで初出誌でしか読めなかった、「詩と性愛」と「蓮の神話学」をめぐる貴重な講演、インタビュー、対談、座談を収録し「幻のインド」と題した。インドの詩と神話を「蓮」が一つに結び合われているという意味で、本書全体をあらわすタイトルとして「蓮の宇宙」を採用した。松山文学論の集大成である『綺想礼讃』と対になる、松山インド論の集大成の実現を目指した。

本書が一つの核となつて、松山インド学の全体——既刊の三冊の単行本と未完の三つの雑誌連載、さらには本書には収録できなかった諸論考——に有機的な関係性が生起することを願っている。

（解題より抜粋）

著者

松山俊太郎

Shunro Matsuyama

一九三〇年—二〇一四年。

東京生まれのインド学者、幻想文学研究者。

一九五一年、東京大学教養学部文科二類（現在の文科三類に相当）に入学。

一九五三年、文学部印度哲学科に進学し、

サンスクリット文学（サンスクリット語）を専攻。

同大学院修士課程（印度哲学専攻）修了。

サンスクリット学者として蓮を研究。

著書に『インドを語る』『蓮と法華経』『綺想礼讃』、

訳書に『タントラ』（フリリップ・ローソン著）などがある。

また、『小栗虫太郎傑作選』の編集・校訂を担当。

澁澤龍彦と深く交流し、

『澁澤龍彦全集』『澁澤龍彦翻訳全集』の編集委員を務めた。



編・解題

安藤礼二

Retji Ando

一九六七年、東京都生まれ。

文芸評論家、多摩美術大学美術学部准教授。

早稲田大学第一文学部卒業。

出版社を経て、二〇〇二年『神々の闘争 折口信夫論』で

群像新人文学賞優秀作を受賞、批評家としての活動をはじめ。

二〇〇六年、『神々の闘争 折口信夫論』で芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

二〇〇九年、『光の曼陀羅 日本文学論』で大江健三郎賞と伊藤整文学賞を受賞。

二〇一五年、『折口信夫』で角川財団学芸賞とサントリー学芸賞を受賞。

他に、『近代論 危機の時代のアルシーヴ』場所と産霊 近代日本思想史』祝祭の書物 表現のゼロをめぐる』などの著作がある。



ご注文締め切り：2016年6月30日(当社着)

書店様印・番線

松山俊太郎 蓮の宇宙を 冊申し込めます。

定価：9,000 円＋税 ISBN：978-4-7783-1491-0

お名前

ご住所

太田出版

〒160-8571 東京都新宿区愛住町22 第3山田ビル4F
Tel 03-3359-6262 Fax 03-3359-0040